

# 『教行信証』の「化身土巻」における「横超」の奥義

森村 森 鳳

## はじめに

『教行信証』における「化身土巻」の奥義は「顕浄土方便化身土文類」と『顕浄土真実教行証文類』いうタイトルによって示されている。「顕浄土の真実を顕す」文類に含まれる「浄土の方便を顕す」という「化身土巻」は、真実の中での方便を顕す巻、あるいは、真実と方便の関係を顕す巻である

「化身土巻」に善導の『観経疏』の「玄義分」の中の文を引用し、仏教にさまざまな法門のあることを述べ、横超が他力であることを強調するところがある。

引用文は次のようである。

『教行信証』の「化身土巻」における「横超」の奥義

凡就一代教、於此界中入聖得果、名聖道門、云難行道。就此門中、有大・小、漸・頓、一乘・二乘・三乘、權・実、顕・蜜、豎出・豎超。則是自力、利他教化地、方便權門之道路也。於安養淨刹中入聖証果、名浄土門、云易行道。就此門中、有横出・横超、仮・真、漸・頓、助・正・雜行、雜修・專修也。正者、五種正行也。助者除名号已外五種是也。雜行者、除正助已外悉名雜行。此乃横出漸教、定散三福、三輩九品、自力仮門也。横超者、憶念本願離自力之心、是名横超他力也。斯即專中之專、頓中之頓、真中之真、乘中之一乘、斯乃真宗也。

おおよそ一代教について、この界の中にして入聖得果するを「聖道門」と名づく、難行道と云えり。この門の中について、大・小、漸・頓、一乘・二乘・三乘、權・実、顕・蜜、豎出・豎超あり。す

なわちこれ自力、利他教化地、方便権門の道路なり。安養淨刹の中にして、入聖証果するを「浄土門」と名づく、易行道と云えり。この門の中について、横出・横超、仮・真、漸・頓、助・正・雜行、雜修・專修あるなり。「正」とは、五種の正行なり。「助」というのは名号を除きて已外の五種これなり。雜行とは、正助を除きて已外のことごとく雜行と名づく。これすなわち横出・漸教、定散三福、三輩九品、自力仮門なり。横超とは、本願を憶念して自力の心を離るる、これ横超他力と名づくなり。これすなわち專の中の專、頓の中の頓、真の中の真、乗の中の一乗なり。これすなわち真宗なり<sup>①</sup>。

文の中での豎出・豎超・横出・横超は浄土真宗の教判として「二双四重」と呼ばれ、親鸞の思想を特徴づける一つとされている。本論は、横超と二十二願の関係を明らかにするうえで、横超を豎出・豎超・横出との相関関係において、「化身土巻」における横超の奥義を追求してみたいと思う。

まずは、横超の「超」の源を遡ってみたい。

## 一 『十地經』に秘められた密意

『十地經』は大乗菩薩の修行階位である十地によって菩薩行を説き、無上の仏果を得る道を明らかにしている。釈尊自身にも十地に密意が潜

められていることを明示している。

唯諸仏子。一切菩薩有十智地。是以過去未來現在諸仏。已說當說今說。由此密意我作是言。

ただ諸仏子よ、一切の菩薩に十智地あり。これを以て、過去・未來・現在の諸仏は、已に説き、當に説き、今に説く。この密意により、我、この言を作す<sup>②</sup>。

すなわち、過去の諸仏・未來の諸仏・現在の諸仏が説いている「十智地」の密意により、この『十地經』を説くのであると。

その密意を握るカギは十地の中での第七地にあると思われる。功を積み重ねて仏果を得るために語られる修行階位である十地には、実は自力の修行で超えられない難関がある。それは七地にある。

菩薩於七地中得大寂滅、上不見諸仏可求、下不見衆生可度。

菩薩は七地の中にして大寂滅を得れば、上に諸仏の求むべきを見ず、下に衆生の度すべきを見ず<sup>③</sup>。

菩薩は七地に入ってから大寂滅を得て、「空」の真理を悟れば、「空」そのものに陥ってしまう。上へと成仏を求め、下へと衆生を度すという今までの志を見失ってしまい、「空」の「難」に陥ってしまう。いわゆる

「七地沈空の難」である。

譬如有二世界。一処雜染。一処純淨。是二中間。難可得過。唯除菩薩有方便神通願力。乃可得過。仏子。諸菩薩諸地亦覆如是。有雜染行。有清淨行。是二中間。難可得過。唯除菩薩有大願力方便智慧。乃能得過。

譬えば二の世界があるが如く、一処は雜染なり、一処は純淨なり。この二の中間は、過ぐることを得るべきこと難し。ただ、菩薩に大方便神通願力ありて、すなわち過ぐることを得るべきは除かん。仏子よ、もろもろの菩薩の諸地も（覆<sup>また</sup>）かくの如きなり。雜染の行あり、清淨の行あり。この二の中間は過ぐることを得べきこと難し。ただ、菩薩に大願力方便智慧のありて、すなわち能く過ぐることを得べきは除かん<sup>(4)</sup>。

七地は、清淨界と雜染・垢穢界、世間と出世間の中間地帯である。煩惱としての存在と解脱としての存在の最後の分水嶺である。ここは、菩薩が今までの、煩惱そのものである自身と最後に決別する場である。ここに至って菩薩は今までの煩惱界から抜け出し、涅槃に入るものの、いまだ真の彼岸に至ることになっていない。

如七住菩薩。觀諸法空無所有不生不滅。如是觀已於一切世界中心

『教行信証』の「化身土卷」における「横超」の奥義

不著。欲放捨六波羅蜜入涅槃。譬如人夢中作筏渡大海水。手足疲勞生患厭想。在中流中夢覺自念言。何許有河而可渡者。是時勤心都放。菩薩亦如是立七住中得無生忍。心行皆止欲入涅槃。

七住の菩薩の如し。諸法は空なり、無所有なり、不生不滅なりと觀じ、かくの如く觀じおわり、一切世界の中に於いて、心、著せず。六波羅蜜を放捨し、涅槃に入らんと欲す。譬えば、人、夢の中に筏を作りて大海水を渡るが如し。手足、疲勞し、患厭の想を生じ、中流の中にありて、夢覺めて自から念じて言く。いずこに河ありて渡るべきか。この時、勤心すべて放つ。菩薩、またかくの如く七住の中に立ち、無生忍を得て、心行、みな止み、涅槃に入らんと欲す<sup>(5)</sup>。

七地に入るとき、菩薩は諸法が空であり、無所有であり、不生不滅であることを覺り、一切の執着から解放される。ところが、疲れ果てた菩薩は、飽きて厭になり、七地に入るや否や、彼岸に至る目標を放棄し、ここで涅槃に入ろうとする。

一定清淨。一定垢穢。是中間難可得過。但以大精進力。大神通力。大願力故。能過耳。諸仏子。諸菩薩如是。行於難道。難可得過。但以大願力。大智慧力。大方便力故。乃可得過。

一定は清淨なり。一定は垢穢なり。この中間は過ぐることを得るべきこと難し。但し、大精進力・大神通力・大願力を以ての故に能

く過ぐるのみ。もろもろの仏子よ、もろもろの菩薩は、かくの如し。難道を行じ、過ぐることを得べきこと難し。但し、大願力・大智慧力・大方便力を以ての故に、すなわち過ぐることを得べし。<sup>⑥</sup>

すなわち第七地から第八地に上ることは、真の仏果を得ることを意味するのである。であればこそ、まだ如来の力を身につけていない八地までの菩薩は、諸仏の助力に恵まれなければ八地に上がれない。八地に上らなければ、涅槃しても、仏になれず、せいぜい二乗になるにすぎないというのである。

若不得十方諸仏神力加勸即便滅度與二乘無異。

若し十方諸仏の神力加勸を得ずば、すなわち滅度しても二乗と異無けむ。<sup>⑦</sup>

いかにして諸仏の恵みを得られるか。いつまで待つか。それはわからないことである。ここに至り、菩薩は自身の力ではどうすることもできなくなり、諸仏の力を恵まれるまで待機する他ない。

これはすなわち十地の中に用意された難関である。菩薩自身の力でどうすることもできない、超えられない障碍であり、自力の修行で免れない「七地沈空」の難である。しかし、これを越えなければ求道の道の目的地に永遠に到達することはできない。すなわち、仏になることはない。

釈尊が『十地経』において如来の「大願力方便智慧力」などを得る菩薩しか七地から八地に至ることができないことを説いたが、如来の助力を得る方法については直接に説いていない。すなわち「七地沈空」の難を免れる方法は『十地経』に明示されていない。

このようにして、修行の過程を説いたかのようなこの『十地経』は、その中に「七地沈空」の難が用意されているので、実は自力修行の行き詰まりの必然性を示している。これは『十地経』に秘められた密意ではないかと考えられる。

## 二 密意を明らかにした祖師たちの系譜

この『十地経』の密意を最初にあきらかにするのが天親である。天親が『浄土論』で次のように受け止めている。

偈言「観仏本願力遇無空過者能令速満足功德大宝海」故。即見彼仏未証淨心菩薩畢竟得証平等法身、與淨心菩薩、與上地諸菩薩畢竟同得寂滅平等故。

偈に「観仏本願力遇無空過者能令速満足功德大宝海」といえるが故に。すなわち彼の仏を見たとまつれば、未証淨心の菩薩畢竟して平等法身を証することを得て、淨心の菩薩と上地のもろもろの菩薩と畢竟して同じく寂滅平等を得るが故なり。<sup>⑧</sup>

この文は、七地以下の菩薩が本願力に乘じ、阿弥陀如来を見れば、八地以上の菩薩と同様に寂滅平等を得ることを述べている。これこそ、「七地沈空」の難を免れる道である。それが『大無量寿経』の二十二願に示されているのである。二十二願の願文は次のようである。

設我得仏、他方仏土諸菩薩衆、来生我国、究竟必至一生補処。除其本願自在所化、為衆生故、被弘誓鎧、積累德本、度脱一切、遊諸仏国、修菩薩行、供養十方諸仏如来、開化恒砂無量衆生、使立無上正真之道。超出常倫諸地之行現前、修習普賢之徳。若不爾者不取正覚。

たとい我、仏を得んに、他方の仏土のもろもろの菩薩衆、我国に来生して、究竟して必ず一生補処に至らん。その本願の自在所化、衆生の為のゆえに、弘誓鎧を被て、徳本を積累し、一切を度脱し、諸仏の国に遊びで、菩薩の行を修し、十方の諸仏如来を供養し、恒砂無量の衆生を開化して、無上正真の道に使立てしめんを除かん。常倫に超出し諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。もし爾らずんば正覚を取らじ。<sup>⑨</sup>

他方の国の菩薩たちが阿弥陀の浄土に生まれてくれば、必ず菩薩としての最高位、一生補処の位に至らせようと誓ったものである。すなわち、その願力に乗れば、浄土を目指す菩薩たちは常並みの菩薩修行の段階を

『教行信証』の「化身土巻」における「横超」の奥義

経過しなくても一生補処の位に至ることができるはずであるというものである。文の中の常並みの菩薩修行の段階を超えるという意味を表す文である「超出常倫諸地之行現前」の中の「超」は「横超」の「超」の語の元である。（以下の論で明らかにする。）

天親が『浄土論』の文にこめられた意味を解明し、天親の受け止めの根拠をさらに明示するのは、曇鸞である。それは『浄土論註』において次のように説かれている。

平等法身者、八地已上法性生身菩薩也。寂滅平等者、即此法身菩薩所証寂滅平等之法也。（中略）未証浄心菩薩者、初地已上七地以還諸菩薩也。（中略）菩薩於七地中得大寂滅、上不見諸仏可求、下不見衆生可度、欲捨仏道証於實際。爾時若不得十方諸仏神力加勸即便滅度與二乘無異。菩薩若往生安樂浄土、見阿弥陀仏、即無此難。

平等法身とは、八地已上の法性生身の菩薩なり。寂滅平等とは、すなわちこの法身の菩薩の所証の寂滅平等の法なり。（中略）未証浄心菩薩とは、初地已上七地以還のもろもろの菩薩なり。（中略）菩薩七地の中に大寂滅を得れば、上に諸仏の求むべきを見ず、下に衆生の度すべきを見ず。仏道を捨てて實際を証せんとす。そのとき若し十方諸仏の神力の加勸を得ずばすなわち滅度して二乗と異なけん。菩薩もし安樂浄土に往生して、阿弥陀仏を見たてまつるに、すなわちこの難なけん。<sup>⑩</sup>

初地已上七地以還の菩薩は阿弥陀仏を見れば八地以上の菩薩と同じように平等法身を得ることができる。すなわち、初地以上七地以下の菩薩は阿弥陀仏を見るならば、七地を通らなくても八地已上の菩薩と同じように平等法身を得ることができる。「七地沈空の難」に陥らなくて済むのである。

曇鸞は『浄土論註』で二十二願の言葉を引きながら、その中の「常倫に超出し諸地の行現前し」を踏まえて次のように推論する。

案此経推彼国菩薩或不従一地至一地。言十地階次者、是釈迦如来於閻浮提一応化道耳。他方浄土何必如此。

この経を案じて彼国菩薩を推するに、或は一地より一地に至らざるべし。十地の階次と言うは、これ釈迦如来、閻浮提にして一つの応化道ならくのみ。他方の浄土は、何ぞ必ずこの如くならむ。<sup>⑪</sup>

即ち、二十二願によれば、求道の目的地を阿弥陀の浄土に定めるならば、初地以上七地已還の菩薩は阿弥陀如来の願力に乗り、一地一地と通らなくても、行けるわけである。七地を通らずに目的地に到達することができ、七地沈空の難をおのずから免れるというのである。

善導の『観経疏』の「玄義分」には、以上に述べてきた『十地経』に秘められた密意に光を当てて、他力念仏の神髄を汲み、伝えようとしてきた祖師たちの脈打っている言葉がある。

道俗時衆等 各発無上心 生死甚難厭 仏法復難欣 共発金剛志  
横超断四流

道俗時衆等、おのおの無上心を発せ。生死、はなはだ厭い難し。仏法、また欣い難し。共に金剛志を発して、横超して四流を断ぜよ。<sup>⑫</sup>

この中の「横超断四流」という言葉は『大無量寿経』の二十七願の願成就文による由来である。

必得超絶去、往生安養国。横截五恶趣、恶趣自然闭、昇道無窮極、易往而無人。其国不逆违、自然之所牵。」

必ず超絶して去ることを得て、安養国に往生せよ。横に五恶趣を截り、恶趣自然に閉じん、道に昇ること窮極なし、往き易くして人なし。その国逆違せず、自然の牽くところなり。<sup>⑬</sup>

「横超断四流」は、「横截五恶趣、恶趣自然闭」という句を集約する語である。従来、親鸞の横超という言葉は善導の「玄義分」の「横超断四流」による語とされてきたが、注目すべきところがある。善導の『観経疏』においては横超と『十地経』と『大無量寿経』の二十二願との関係を明示していないものの、「言上上者是四地至七地已来菩薩（上上と言ふはこれ四地より七地に至る已来の菩薩）」と、『観経』に説かれる九品往生の中の上品上生を四地より七地以下の菩薩に慧遠などの諸師が位置

づけていることを指摘するところがある。そこに、「横超断四流」の「横超」が『十地経』に説かれる「七地沈空」と『大無量寿経』の二十願、及び天親・曇鸞の受け止めとのつながりがうかがえる点である。「信巻」に次のような文がある。

横超断四流者、横超者、横者对竖超・竖出、超者、对迂对廻之言。竖超者、大乘真实之教也。竖出者、大乘権方便之教、二乗、三乗迂廻之教也。横超者、即願成就一実円満之真教、真宗是也。亦復有横出、即三輩・九品・定散之教、化土・憊慢・迂廻之善也。大願清浄報土、不云品位、階次、一念須臾頃、速疾超証無上正真道。故曰横超。

横超断四流と言うは、横超は、横は竖超・竖出に対す、超は迂に對し廻に對するの言なり。竖超は、大乘真实の教なり。竖出は大乘権方便の教、二乗・三乗迂廻の教なり。横超は、すなわち願成就一実円満の真教、真宗これなり。また横出あり、すなわち三輩・九品・定散の教、化土・憊慢・迂廻之善なり。大願清浄の報土には、品位、階次をいわず、一念須臾の頃に、速やかに疾く無上正真道を超証するがゆえに横超と曰うなり<sup>14</sup>。

「大願清浄の報土には、品位、階次をいわず、一念須臾の頃に、速やかに疾く無上正真道を超証す」という文は、祖師たちの解明を踏まえて、

『教行信証』の「化身土巻」における「横超」の奥義

「七地沈空」を超越する道が『大無量寿経』に説かれる二十二願にある、つまり、「常倫に超出し諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん」という文に潜む意味を明らかにしていると考えられる。

同一念仏無別道 猶如溜湮一味也 觀彼如来本願力 凡愚遇無空過者 一心専念速満足 真实功德大宝海  
同一に念仏して別の道なければなり。なお溜湮の一味になるが如きなり。かの如来の本願力を觀するに、凡愚遇うて空しく過ぐる者なし。一心に専念すれば速やかに、真实功德の大宝海を満足せしむ<sup>15</sup>。

「一心に専念すれば速やかに、真实功德の大宝海を満足せしむ」という文は、念仏と横超の關係を示しているが、「觀彼如来本願力 凡愚遇無空過者」という天親の『浄土論』の引用に横超と二十二願の關係が示されていると思われる。そして「依修多羅顯真实 光闡横超大誓願」という「正信偈」における天親を称賛する言葉に、はっきり横超という言葉は善導の先に天親に拠ることを示している。

### 三 「二双四重」に位置づけられる横超

親鸞は、横超からの展開を『愚禿鈔』で真宗の教判である「二双四重」に次のように位置づけている。

真実有二種

一者自利真実

難行道 聖道門

豎超 即身是仏 即身成仏 自力也

豎出 自力中之漸教 歴劫修行也

二者利他真実

易行道 浄土門

横超 如来誓願 他力也

横出 他力中之自力 定散諸行也

就自利真実復有二種

一者厭離真実

聖道門 難行道

豎出 自力

豎出者難行道之教、以厭離為本、自力之心故也

二者欣求真実

浄土門 易行道

横出 他力

横出者易行道之教、以欣求為本、何以故、由願力令厭捨生死之故也

真実に二種あり

一には自利真実なり

難行道 聖道門

豎超 即身是仏 即身成仏 自力なり

豎出 自力の中の漸教 歴劫修行なり

二には利他真実なり

易行道 浄土門

横超 如来の誓願他力なり

横出 他力の中の自力なり 定散諸行なり

自利真実についてまた二種あり

一には厭離真実なり

聖道門 難行道

豎出 自力

豎出とは難行道の教なり、厭離をもって本となす、自力の心なるがえなり

二には欣求真実なり

浄土門 易行道

横出 他力

横出とは易行道の教なり。欣求をもって本となす、何をもつての

ゆえに。願力によりて生死を厭捨せしむるがゆえなりと。<sup>16)</sup>

この位置づけによれば、自利真実には豎超と豎出があり、また利他真実には横超と横出がある。ここで、横超から真実へ、自利から利他へと、自利真実・利他真実が自力・他力、豎超・横超・豎出・横出との関係図におかれ、二種真実と横超が絡み合うことになる。横超から真実へ、自

力から豎超・横超・豎出・横出の相互関係について、次のような解釈がある。

聖人にあつては、雑行とは本来、浄土往生の行でないところの聖道門の諸行を言ったもので、この諸行を浄土に廻向して往生を求めようとするのでこれを雑行と名づけ、さらにそれは自力の行として廃すべきものであるとされたのである。(中略)これを雑修と名づけて退けられたのであるといふことができる。<sup>17)</sup>

この「廃すべきものである」、「退けられた」という排他的な受け止めかたに対して、次のような見解もある。

私たちは、仏が説いた法門について、それ自体の是非善悪を判断してはならないのではないですか。この引文にははっきりと「種々の法門みな解脱す」とあります。<sup>18)</sup>

以上の見解を踏まえて、二種の真実の真意をさらに深く探ってみたい。まず、自利も利他も「真実」の連体修飾語であるところに注目しよう。では、ここでの「真実」は親鸞において何を意味するか。次の「信巻」の文はそれを明示している。

真実有二種。一者自利真実、二者利他真実。(乃至)不善三業必須真実心中捨。又若起善三業者必須真実心中作。不簡内外明闇、皆須真実故名至誠心。

(中略)言真実者、『涅槃經』言。実諦者、一道清浄無有二也。言真実者即是如来、如来者即是真実。真実者即是虚空、虚空者、即是真実。真実者即是仏性、仏性者即是真実。

真実に二種あり。一には自利真実、二には利他真実なり。(乃至)不善の三業は必ず真実心の中に捨てたまへるを須いよ、またもし善三業を起さば必ず真実心の中に作したまへるを須いて、内外明闇を簡ばず、みな真実を須いるがゆえ、至誠心と名づく」と。

(中略)真実というは、『涅槃經』に言わく、実の諦は一道清浄にして二あることなきなり也。真実というは、すなわちこれ如来なり。如来はすなわちこれ真実なり。真実はすなわちこれ虚空なり。虚空はすなわちこれ真実なり。真実はすなわちこれ仏性なり。仏性はすなわちこれ真実なり、と。<sup>19)</sup>

ここに、真実は実諦・如来・虚空・仏性であると、はっきり如来のものであると示している。しかも、自利真実と利他真実を分けて説いているのではなく自利真実を排除せずに、それと利他の真実を統括して述べているのである。つまり、横超・豎超・横出・豎出は、時空に次元を異にしているが、「化身土巻」においては、そのすべてが「真実」という

如来の働く場に収められていると考えられる。

親鸞は、この中での横超・豎超・横出・豎出について、「横超」は、「横」は豎超・豎出に對し、「超」は迂に對し廻に對する言であり、「豎超」は、大乘真実の教である。「豎出」は大乘権方便の教、二乗・三乗迂廻の教である。「横超」は、すなわち願成就一実円満の真教、真宗である。横出は、三輩・九品・定散の教、化土・懈慢・迂廻之善であると解釈する。このような解釈を、以上の真実についての解釈を踏まえて見れば、横超・豎超・横出・豎出に真実と方便の違いがあるが、すべて如来の働きに収められていると考えられる。

親鸞は、『文類聚鈔』において、二十二願を引用した後に次のように説いている。

是以浄土縁熟、調達・闍王興逆害、濁世機憫、釈迦韋提選安養。情思彼静念此、達多・闍世博施仁慈、弥陀・釈迦深顯素懷。依之、論主宣布广大無碍淨信、普遍開化難染堪忍群生。宗師顯示往還大悲廻向。慇懃弘宣他利他深義。聖權化益偏為利一切凡愚、广大心行、唯欲引逆惡闍提。

ここをもって、浄土縁熟して、調達、闍王をして、逆害を興ぜしめ。濁世の機を憫みて、釈迦、韋提をして安養を選ばしめたまへり。つらつら彼を思い、静かに此を念うに、達多、闍世、博く仁慈を施し、弥陀・釈迦、深く素懷を顯せり。これに依りて、論主、广大無

碍の淨信を宣布し、あまねく難染堪忍の群生を開化す。宗師、往還大悲の廻向を顯示して。慇懃に他利・利他の深義を弘宣せり。聖權の化益、あまねく一切凡愚を利せんがため、广大の心行、ただ逆惡闍提を引せんと欲してなり。<sup>30)</sup>

相互交錯している現実の時空とそれを超える超越の時空との絡み合いは登場人物によって顯されている。ここに、逆害を興す調達・闍王と、博く仁慈を施すという達多・闍世の役割が入り替わり、如来と衆生の役割のずれと重なるなか、親鸞においての衆生と如来の関係がダイナミックかつ具体的に表現されている。

その核心に、如来の還相回向と往相廻向の働きがある。(還相回向と往相廻向について他の論で詳しく論じる)

これは、「難易對・頓漸對・横豎對・(中略)自力他力對」という自他對立の中の他力、つまり相対的な他力と、それを超える「案本願一乘海円融満足極速無碍絶対不二之教<sup>31)</sup>」という関係図の具体的な現れだとも言えよう。

このような親鸞の絶対他力の深意は『教行信証』の「証卷」に引用された曇鸞の「広略相入」という言葉によく示されている。

何故示現広略相入、諸仏菩薩有二種法身。一者法性法身、二者方便法身。由法性法身生方便法身。由方便法身出法性法身。此二法身

異而不可分。一而不可同。是故広略相入、絃以法名。菩薩若不知広略相入、則不能自利利他。

何がゆえぞ広略相入を示現すとならば、諸仏菩薩に二種の法身あり。一つには法性法身、二つには方便法身なり。法性法身に由って方便法身を生ず。方便法身に由って法性法身を出だす。この二つ法身は、異にして分つべからず。一にして同じかるべからず。このゆえに広略相入して、絃ぬるに法の名をもつてす。菩薩もし広略相入を知らざれば、すなわち自利利他にあたわす<sup>(22)</sup>。

「広略相入」は法性法身と方便法身によって象徴的に仏教の真実の教えと方便の教えの関係を表す言葉である。本願の一乗法と八万四千の法門にあたって言えば、広（方便法身）は、八万四千の法門、千差万別の縁に応じて顕現する身であり、略（法性法身）は「本願一乗海円融満足極速無碍絶対不二の教」である。それは「真実智慧実相智慧也。実相無相故真智無知也。（真実智慧は実相の智慧なり。実相は無相なるがゆえに真智は無知なり）」<sup>(23)</sup>という。つまり、円融・満足・極速・無碍・絶対不二の本願一乗海は、人知に次元を異にして、無形でありながら、智慧の光として無明を照らしている。無作為でありながら、働いている。

或於此方破惑証真、則運自力故、談大小諸経。或往他方聞法悟道、須憑他力故、説往生淨土。彼此雖異、莫非方便令悟自心。

『教行信証』の「化身土卷」における「横超」の奥義

あるいはこの方にして惑を破し、真を証し、すなわち自力を運ぶがゆえに、大小の諸経に談ず。あるいは他方に往き法を聞き道を悟るは、須らく他力を憑むべきがゆえに、往生淨土を説く。彼・此異なりといえども、方便にあらざることなし、自心を悟らしめんとなり<sup>(24)</sup>。

つまり、この穢土で疑惑を破り、真実を求めるときに、自ら經典に学び、彼岸へと悟りを開こうするには、他力に依らなければならないのであるが、このすべてが本願慈悲方便のご縁によるものである。「聖権の化益、ひとえに一切凡愚を利せんがため、広大の心行、ただ逆惡闡提を引せんと欲してなり」という。

池田勇諦の次の文は以上の内容をよりわかりやすく表している。

この化は、「法身中の化身」です。つまり法身の具体的な働きを意味します。それは私たちの現実に応同して、様々な姿・かたちをとる。つまり変化して、私たちを教え導き、目覚めさせてくださるご苦労の意味での法身中の化身と言われます<sup>(25)</sup>。

#### 四 横超と「三願転入」

以上、横超の深意と、横超と豎超・横出・豎出との関係を通して、親

鸞においての「二種真実」について考察してきた。最後に、「横超」と「三願転入」の関係に潜んでいる真実を説明していこうと思う。

愚禿釈鸞、仰論主解義、依宗師勸化、久出万行諸善之仮門永離双樹林下之往生、回入善本徳本真門偏発難思往生之心。然今特出方便真門転入選択願海、速離難思往生之心欲遂難思議往生、果遂之誓良有由哉。

愚禿釈の鸞、論主の解義を仰ぎ、宗師の勸化に依って、久しく万行諸善之仮門を出でて永く双樹林下の往生を離る、善本・徳本の真門に回入して、ひとえに難思往生の心を発しき。しかるに今、特に方便の真門を出でて、選択の願海に転入せり、速やかに難思往生の心を離れて、難思議往生を遂げん欲う。果遂の誓い、良に由あるかな。<sup>(26)</sup>

ここで親鸞は自ら「愚禿釈鸞」として化身土の舞台に登場する。ここで示される「三願転入」は、「化身土巻」の眼目とも言われ、親鸞の転入の自覚を示すものとして重要である。

古来、「三願転入」と言われるこの部分の三願の中で、「先ず第十九願の門に入り、尋で一転して二十願の意に入り、遂に再転して第十八願の意に入る」<sup>(27)</sup>と、時間の流れに沿って親鸞自身が、第十九願、第二十願の方便から第十八願の真実へと移り進む過程として解釈されてきている。

「宗教体験の内面過程」ともいわれている。

この解釈によれば、「三願転入」は人間の行動する経過と心理の変化に即して漸次に達成する修行となる。それは今まで考察してきた二十二願に説かれる「横超」とはどうも矛盾するように感じられる。

なぜなら、「娑婆化主、因其請故、即広開浄土之要門。安樂能人顕彰別意之弘願」<sup>(28)</sup>といわれる第十九願の門に入るときに、すなわち求道の道の目的地を阿弥陀の浄土に定めることになる。二十二願の願文によれば、阿弥陀如来の願力に乗り、一地一地と通らなくても、目的地に到達することができるといのである。「大願清浄報土、不云品位、階次、一念須臾頃、速疾超証無上正真道」(大願清浄の報土には、品位、階次をいわず、一念須臾の頃に、速やかに疾く無上正真道を超証す。<sup>(29)</sup>)ということになるわけである。

矛盾を解決するカギは、「顕彰隱密」という言葉にあると思う。親鸞は『観経』に「顕彰隱密」があると強調している。私は中国語翻訳の過程で、「化身土巻」、否、「化身土巻」だけではなく、『教行信証』そのものに「顕彰隱密」があると思う。

三願の中で、「先ず第十九願の門に入り、尋で一転して二十願の意に入り、遂に再転して第十八願の意に入る」と、親鸞自身が、第十九願、第二十願の方便から第十八願の真実へと移り進む過程として説く。これは、現実の人間が行動する経過に即して説かれる転入の過程であり、読者と同じ生身の人間による体験であるから、読者は自らもその過程を体

験できそうな臨場感を得ることができるのである。これは、人間の理性で意味づけられるものである。しかし、「若し後雜行を行すれば、即ち心、常に間斷し、回向して生を得可しと雖も、すべて疎雜の行と名づくなり」<sup>(30)</sup>に示されるとおり、衆生主体の修行は現実的な時間の流れをたどるほかにない。

この理性的な枠組みを内側からつき破るように、前に引用した親鸞の「三願転入」の文の中の言葉が次のようにより深い読みを促している。

1 「今」という時間。この今は、過去の出来事についての記述ではなく、この今は過去と未来が凝縮している一瞬一瞬の永遠の現在である。

2 「難思議往生を遂げん欲う」の「遂げようとする」という動詞の未然形。つまり、「三願転入」を遂げるのは、過去完成体ではなく、現在進行形でありながら、永遠の未然形である。これについて池田勇諦は次のような示唆を示している。

親鸞聖人は、信心成就に立って限りなく因位の願心に帰って行かれた。つまり果上に立たれなかった。否、立てなかった。もう出来上がった、満足したというところに立てなかった。それは「完」に触れて、いよいよ「未完」があぶりだされ、問い続けていかれたからです。<sup>(31)</sup>

3 果遂の誓い、良に由あるかな。果遂の誓いとは、必ず報土往生を果し遂げさせる本願のこと、「果遂せずば正覺をとらじ」とあり、自力の念仏を励むものも、真実の報土に生まれ遂げさせようという二十願である。

「果遂の誓い、良に由あるかな」という感嘆の言葉に、親鸞の二十願に対する深い領きが響いている。

第十九願↓第二十願↓第十八願へと転じる過程は人間によって実行されるが、三願とも如来の誓願であり、「円融至徳の嘉号は悪を転じ徳をなす正智」<sup>(32)</sup>と、転じる原動力は名号の働きである。

一つ一つ意味深い言葉は矢印のように、その「顕」意にたどり着いた読者を密（蜜）意へと、案内している。

そして、三願転入に方向づけるのは、「三願転入を読み取る眼」<sup>(33)</sup>といわれるこの文の直前に引用された善導の『往生礼賛』の次の文である。

悲哉、垢障凡愚、自從無際已来、助正間雜、定散心雜故、出離無其期。自度流転輪回超過微塵劫、巨帰仏願力、巨入大信海。

悲きかな、垢障の凡愚、無際より已来、助・正間雜し、定散心雜するゆえに、出離その期なし。自ら流転輪回を度るに、微塵劫を超過すれども、仏願力に帰しがたく、大信海に入りがたし。<sup>(34)</sup>

（\*「巨」という文字は、「可」を反転した形であり、漢文の発音も「不可」<sup>ふか</sup>となり、不可能・できないことを意味する。）

これについて、池田勇諦は次のように述べている。

「微塵劫を超過すれども、大信海に入りがたし」と。この「入りがたし」の「がたし」とは、相対的な意味でありませぬ。絶対の難、不可能の意味です。微塵劫を超えて過ぎても、大信海に帰入する不可能の自分があぶりだされる<sup>35)</sup>。

以上の文に指摘されたとおり、善導の悲嘆は、凡夫でありながら、自らの力で、要門（定散の門）に入っても、「入り…一転して…入り、再転して…入る」中での、動作の主体が凡夫である限り、つまり、これらの動詞の主語が「自我」を終始すれば、いくら転じても、その延長線で「ときをへず、日をへたてず」という「選択願海に転入」するわけではないことを示しているのである。

信順為因、疑謗為縁、信樂彰於願力、妙果顕於安養矣。

信順を因とし、疑謗を縁とし、信樂を願力に彰し、妙果を安養に顕さん。<sup>36)</sup>

「信樂」（十八願）が願力に彰され、大信海に入るという妙果を此岸ではなく、彼岸の安養（浄土）に顕されることが明示されている。

## おわりに

人間中主義的な歴史観は、自己の眼だけで世界を見て、歴史の流れを「今・ここ・我」に向けて一直線に進化してきた過程としてとらえる傾向がある。現代の人々は、無意識的に、そのような自我中心的な考え方になじんでしまい、出来事は一直線に「今・ここ・我」の方向を目指してよりよい方向へと一直線に進んできたと考えがちである。（逆により悪い方向へと進んできたという考えもある。基本的に同じ考えるケースである。例えば、ルソーの「自然回帰」思想である。）

その思考のケースによれば、入信する修行は定められた方向へまっすぐによりよい方向へ、より真実のものが連続的に顕現してくるプロセスとしてとらえられる。それにより、人間の理性に選ばとられた一つの「線」だけを残して、理性の思考に収められない多元的な宇宙時空を合理主義の思考の一次的なケースに収束してしまう。

その結果、「三願転入」の「顕」の真実、すなわち理性で説明できる人間を主体とする一部だけをとらえ、その奥に潜んでいる「隠」の真実、つまり理性を超える如来の本願の働きから目をそらすことになる。

本願の願いが穢土を教化土に転じる働きとしての「化身土」には、時間・空間の隔たりを超える法身、時間の刻一刻に即して衆生と同步する化身、この二つが常に不離一体で離れることなく働いている。それにより、化身土では、私たちが両足を現実の大地に踏みつけて一歩一歩と進

む現実の時間の流れを、「ときをへず、日をへたてず」という超時が貫いていく。

方便と真実は不離一体で離れない。それは真実の働きが方便だからです。それゆえ方便は常に真実に始発し、真実にならざるものを真実に帰す働きます。(中略) 方便を抜きにすれば真実はまったく抽象的な事柄になって表しようがなくなります。<sup>(47)</sup>

と先学が指摘されるが、さらに言えば、次元の異なる行が「不離一体で働くときこそ、穢土を教化土に転じる本願の願いがその機能を果たすのである。

このような「三願転入」に、「横出」の深意もうかがえるであろう。改めて注目したいのは、二種真実と横超と豎超・横出・豎出との関係の中に、横出が自利真実と利他真実に跨ってあるところである。「横超 如来の誓願他力なり。横出 他力の中の自力なり 定散諸行なり」。私たちがこの穢土に生きている限り、避けて通ることができないのは、横出の道であろう。横出に横超が伴い、衆生の回向行は他力に包まれながら、他力を内包する、如来と衆生の「広略相入」の方便の行であろう。

最後に、この論文では、親鸞の思想を特徴づける「横超」は、大乘仏教の教えの源におかれている言葉であることが明らかにになった。横超を

『教行信証』の「化身土巻」における「横超」の奥義

豎出・豎超・横出との相関関係に考察することによって、親鸞思想の要である他力の真の意味あいをとらえることに近づけたと思う。「横超者即願成就一実円満之真教真宗是也(横超はすなわち願成就一実円満の真教、真宗也これすなわち真宗これなり)」<sup>(48)</sup>というのであれば、親鸞が開いた浄土真宗の道は、仏教の源から流れ出る道でありながら、今、現在を脈打ち生きている仏道だと言えよう。『教行信証』の「化身土巻」における「横超」の根源とその奥義は底なしの深みがあり、本論の追求はその入り口に入っているとしか言えない。より根源に近づく追求は今後の課題として研究を続けていきたいと思う。

#### 注

- (1) 『真宗聖教全書』二 一五四頁
- (2) 『十地経』卷第三『新脩大正大藏経』第十卷五三六頁
- (3) 『真宗聖教全書』二 一〇八頁
- (4) 『大方広仏華嚴経』卷第三十七『新脩大正大藏経』第十卷一九六頁
- (5) 『大智度論』卷第十『新脩大正大藏経』第二十五卷一三二頁
- (6) 『十地経』卷第三『新脩大正大藏経』第十卷五一九頁
- (7) 『真宗聖教全書』二 一〇八頁
- (8) 『真宗聖教全書』一 二七四頁
- (9) 『真宗聖教全書』一 一〇頁
- (10) 『論註』『真宗聖教全書』一 三三三頁
- (11) 『真宗聖教全書』一 三三三頁
- (12) 『真宗聖教全書』一 四四一頁
- (13) 『大無量寿経』『真宗聖教全書』一 三二頁
- (14) 『真宗聖教全書』二 七三頁
- (15) 『真宗聖教全書』二 四八一頁

- (16) 『真宗聖教全書』二 四六六頁
- (17) 高木昭良 『教行信証の意訳と解説』 永田文昌堂 一九七五年四月
- (18) 藤場俊基 『親鸞の教行信証を読み解く』 IV 明石書店二〇〇一年五月
- (19) 『真宗聖教全書』二 六一頁
- (20) 『真宗聖教全書』二 四四六頁
- (21) 『真宗聖教全書』二 四一頁
- (22) 『真宗聖教全書』二 一一一頁
- (23) 『真宗聖教全書』二 一一二頁
- (24) 『真宗聖教全書』二 三八頁
- (25) 池田勇諦 『『教行信証』に学ぶ』 真宗大谷派東京教区聖典学習会講義録 二〇一五年六月
- (26) 『真宗聖教全書』二 一六六頁
- (27) 岡村周薩編纂 『真宗大辞典』一九七二年一月
- (28) 『観経疏』「玄義分」『真宗聖教全書』一 四四三頁
- (29) 『真宗聖教全書』二 七三頁
- (30) 『真宗聖教全書』二 一五〇頁
- (31) 同 (25)
- (32) 『真宗聖教全書』二 一頁
- (33) 同 (25)
- (34) 『真宗聖教全書』二 一六五頁
- (35) 同 (25)
- (36) 『真宗聖教全書』二 二〇二頁
- (37) 同 (25)
- (38) 『真宗聖教全書』二 七三頁